

2018年7・8月号

特集：赤外線イメージングとセキュリティーセンシングへの応用

赤外線は分野によって帯域が異なるが、日本赤外線学会によると、近赤外線（0.83μm～3μm）、中赤外線（3μm～6μm）、遠赤外線（6μm～1000μm）と広い帯域に渡る。赤外線画像関連の市場は、2014年の55億8000万ドルから、2020年には71億8400万ドルの規模に成長すると予測されている。これに伴い、新しいデバイスが学会や展示会で報告されている。気体分子は特定の周波数の赤外線を吸収するが、別の周波数を透過する性質がある。これらの特性を利用することで環境センシングへの応用が期待される。今回の特集では、新しい赤外線イメージングのためのデバイス技術の紹介からセキュリティーのための赤外線可視化応用技術を紹介する。

No.	タイトル	執筆者
1	特集のポイント	宇都宮大学
2	樹脂反射型赤外線レンズ	ナルックス
3	可視光と近赤外線光を同時に撮像可能な撮像素子	東京工業大学
4	広帯域偏光検知非冷却赤外線センサー	三菱電機
5	車載カメラ赤外線カメラナイトビジョン	ビジョンセンシング
6	赤外線によるガスイメージング	宇都宮大学
7	赤外線サーモグラフィによる建物血管検出	日本アビオニクス
8	微小流れの可視化	宇都宮大学
9	超小型中赤外分光イメージングの非侵襲血糖値センサーや環境計測への展開	香川大学

※特集予定は都合により変更になる場合があります。詳細は営業担当にお尋ねください。

発行日：2018年7月25日
原稿締切：2018年6月27日